

小特集「歴史編纂の比較史」

小特集にあたって

この小特集は、2000年2月17日（木）に国文学研究資料館において史料館館内研究会の一つとして開かれた韓日比較史料学研究会「歴史編纂の比較史」の記録である。報告は、

崔 承熙氏（チェ・スンヒ、ソウル大学教授）「朝鮮王朝実録の編纂について」

藤實久美子氏（史料館非常勤研究員）「徳川実紀の編纂について」

であった。この種の国際研究会で重要な役割を担う通訳の方は

方 美英氏（バン・ミョン、御茶の水女子大学大学院生、日本近世史）

金 孝宣氏（キム・ヒョウソン、東京大学大学院生、日本近世史）

であった。なお、司会は渡辺浩一が担当した。

崔承熙氏は朝鮮時代政治史が専門で、『増補版韓国古文書研究』（知識産業社、ソウル、1989年）の著者としても著名な方である。国文学研究資料館が客員教授として崔氏を招いたことから、史料館としても朝鮮古文書学の第一人者との研究交流が不可欠と考え、この研究会が企画された。

比較史の企画は非常に難しい。相互の歴史と社会の違い、および相互の研究状況の違いが間には大きく横たわり、さらにその違いを企画者自身が深く認識することができないままに多くの場合は行われざるを得ない。そのため、今回は、具体的な素材を絞り込み、限定された範囲の中でお互いの常識を認識し合う、ということを基本的な目標とした。この戦略は、岡崎敦「中世史料学の日本と西欧」（『歴史学研究』706, 1998年）から学んだことである。これが成功しているかどうかは読者の判断に委ねたい。

マルク・ブロック『比較史の方法』（創文社、1978年）を引用するまでもなく、相互に直接の影響関係や共通性がない地域同士の比較史は無意味である、とされてきた。ブロックもそれを前提にヨーロッパを念頭においた比較史の方法について論じていたように思う。そのためか、ヨーロッパ内の比較史は非常に盛んであるように見受けられる。筆者の専門である都市史についていえば、都市史国際会議（International Conference of Urban History, European Association of Urban Historians）は既に5回を数えているし、ピーター・クラーク編著『近世ヨーロッパの小都市』（Peter Clark ed., *Small Towns in Early Modern Europe*, Cambridge, 1995）といったかなり特殊なテーマに関する欧州内比較史の論文集も刊行されている。おそらくはこうした雰囲気を基盤に、欧州を中心とした全世界比較史科学の企画もいくつか出てきているようである。例えば、M. V. ロバーツ編『史料と巨大都市』（M. V. Roberts ed., *Archives and Metropolis*, London, 1998）や、R. ブリットネル編『実用的識字能力 東洋と西洋 1200-1330年』（Richard Britnell ed., *Pragmatic Literacy East and West: 1200-1330*, Woodbridge, 1997）がある。問題なのは、こうした全世界比較史科学がヨーロッパ中心に行われるために、アジア・アフリカ地域が付加物として編成されてしまうことである。前者は、第一部「巨大都市の史料—古代から近代へ」、第二部「非行政史料」、第三部「中近世ロンドン」、第四部「保管建築・保存手当・利用」、第五部「史料科学的な巨大都市史」、第六部「アジア・アフリカとアメリカ」、第七部「ロンドン港—史料と歴史」、第八部「世界の転換と巨大都市史料」と、ヨーロッパ内の報告はテーマ別編成を行うが、非ヨーロッパに関しては一括されてしまっている。後者は、第一部「ラテン語・キリスト教圏」、第二部「非ラテン語・キリスト教圏」という、あまりにも露骨なヨーロッパ中心的編成である（この点については岡崎敦氏前掲稿が既に指摘している）。こうした問題点を打破するために、私たちはまずもって、東アジアにおける比較史・比較史科学を構想しなければならない。しかし、これは大変困難である。わが東アジアにはヨーロッパ世界とは異なって言語の共

通性がほとんど存在しないからである。唯一共通であった漢字も、この半世紀の間に韓国では歴史学においても駆逐され、中国と日本では異なる漢字を用いることになってしまった。ヨーロッパの歴史研究者たちが相互に研究成果を参照し合ったり英語やフランス語で直接議論したりするのと同じように、東アジアの歴史研究者が相互に交流することは不可能なのが現状であろう。この小特集は、そうした状況を少しでも打開するために行われているいくつかの試みのなかでの、ささやかな一つである。そうした意図もあって、藤實報告に関してはハングル訳を付した。翻訳は当日の通訳のお一人である金孝宣氏である。これにより徳川実紀に関する最新の研究成果が日本語を読むことができない韓国の方々に摂取されることを期待したい。

最後に、謝辞を述べたい。報告を快く引き受けていただいた崔承熙氏・藤實久美子氏、通訳をお願いした方美英氏・金孝宣氏にまず感謝したい。以上の方々と私の5人で2月初めのある日に崔先生の研究室で準備報告会を行ったときは、本当に比較史の面白さに魅入られたという思いがした。また、崔先生を国文学研究資料館に招いた松野陽一館長にも感謝申し上げたい。このことがなければこの企画は構想もされなかったであろう。さらに、1999年度の史料館客員教授千々和到氏（日本中世史・國學院大學）と併任助教授松島周一氏（日本中世史・愛知教育大学）に多大なご協力を頂いたことは、討論記録を一読すれば看取されるものと思われる。最後に、国際研究会のノウハウについてご教示を賜った、鶴田啓氏（日本近世史・東京大学史料編纂所）・米谷均氏（日本近世史・日本学術振興会特別研究員）にも深く感謝申し上げたい。

（ハローウィンの花火鳴り響くケインブリッジにて、史料館・渡辺浩一）